２０２４年7月３日（水）

老球の細道８１０

「オラ！　スペインへ　危機一髪　」⑤

・・・ユーロバスケットボールツアー紀行〈Ⅲ〉・・・

会津バスケットボール協会　　室　井　冨　仁

全ての男性の憧れのまとジェームズ・ボンドはなぜ危機に強いか。それはピンチになればなるほどジョークをかまし笑顔とユーモアを忘れないからである。だからパニックにならず、困難なピンチも最後には切り抜ける。しかもとびきりの美人もゲットする。

今回のスペインツアーで絶対避けなければいけないピンチを二つ考えていた。一つはパスポートを失くしてしまうこと。もう一つは血圧上昇で病院へ運ばれること。

チャンスは遅めにあらわれる、ピンチは早めにやってくる。ツアーまだ２日目なのに早速ピンチ君登場。寝不足がたたり血圧上昇でフラフラ感が。周囲から「大丈夫ですか？」と心配されながらも、ボンドのようにジョークをかますすべもなし。ただ苦悩あるのみ。寝ながらこれ以上症状が悪化することなくおさまってくれることを願って、不安との格闘の中でいつのまにか眠った。何とか眠りにつきヤマ場を乗り越えて翌朝を迎えたが・・・。

【２０１４年　２月６日（木）】

９時からロス・ギンドスで「ウニカハ・マラガ」育成年代チームの練習見学。練習内容は今まで見たこともないユニークな練習がたくさんあった。日本に帰ったら早く子どもたちに教えてみたいと思わせるものばかりであった。コーデイネーションドリルを必ずバスケットボールにコラボレートさせたドリルは圧巻だった。発想の豊かさを感じずにはいられない。さすが情熱の国スペインである。また、ドリルの練習においては常にコーチが関与し、コーチが自ら動いてゲームシュチエーションを設定して、判断力を養成する場面が多く組み入れられていた。コーチも動けて声を出し続けるガッツが必要である。

今回特に印象に残ったのは、ボールを持ったプレーヤーは常にシュートを狙っているという事である。あたりまえのことではあるが、ちょっとディフェンスに止められるとすぐにパスをさがす日本の子どもたちとは違って、いったんドライブでゴールに向かったら必ずシュートでフィニッシュする。多少のコンタクトなど気にしないから、すべてにおいて強いプレーができる。日本の子どもたちに必ず伝えたい最重要事項である。

午後からは別のプロチーム GM で昨年まで中国のプロチームを指導していたパコ・アウレリオス氏からスペインの育成年代チームの事情について説明を受けた。

U―１２：すべての練習にボールがある。相手がいる状態で練習する。ルールを教えてプレーは自由にさせる。楽しむことが第一。ファンダメンタルは繰り返すが楽しむことを忘れない。スクリーンは教えずオールラウンドプレーを指導する。

U―１３，１４：シュートを徹底して教える。ドリブルチェンジ、パスなどのファンダメンタルも教える。ディフェンスをつけての１：１の練習が主となる。

U―１５、１６：個人技をさらに練習する。ボールを使ったフィジカルトレーニングで体力強化。チームデイフェンスを教えるがゾーンはやらない。

U―１７、１８：スクリーンプレーを教える。ゾーンデイフェンス、プレスデイフェンスも教える。器具を使ったフィジカルトレーニングを実施。

この GM は、アジアはプランニングがなく、判断力を養成する練習が少ないと。〈続く〉